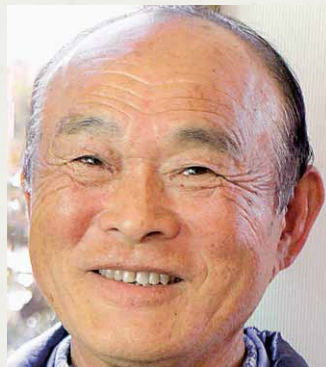




# 発掘! さわめびと

## 茂来山ご来光登山を続けること40年。茂来山を「自分の山」と呼ぶ山男。



お津常男さん  
新津常男さん

1941年小海町親沢生まれ。子供の頃から茂来山を遊び場として育つ。16歳の時、佐久穂町四谷の理容店に丁稚として奉公。24歳の時に独立し東町に店を出す。31歳の時に現在の佐久庁舎前に移転。理容コンクールでの入賞歴はいくつもあるが、「失敗なんか数え切れないくらいある。いまだにお客さんが気に入っても、自分で気に入った仕事でできたことは一度もない」。家族は奥さんと長男夫婦に孫2人の6人。高野町在住。

「家内安全、商売繁盛を祈るかつて？ うーん、それは欲をかきすぎかなって……。やっぱり、この山の下にいる人たちがみなさんの幸せを願いますよね。ここ（山頂）に立てば、そういう気持ちになるでしょう」

### 茂

来山は、寄りかかりだすと、新津常男さんは、いきなりこう話しました。

寄りかかり？

信州百名山の一つで、佐久穂町のシンボルともいえるべき茂来山（標高一七・一七・八m）。茂来山には、佐久穂町側に横沢登山口、霧久保沢登山口、小海町側に親沢登山口があるが、常男さんは、小海町側の登山口がある親沢で生まれ育った。

「親沢は、茂来山の山裾にある集落でしょ？ 茂来山に寄りかかっているようなところで育ったってことだよ」

と言って、常男さんは、椅子の背もたれに寄りかかるような格好をして見せた。

「親父の炭焼きの手伝いで子供の頃から登っているの、茂来

山は私にとっちゃ親父の山であり、遊び場、自分の山ですよ」

常男さんがご来光登山を始めたのは四十歳を過ぎた頃。

それまで、仕事（理髪店）の合間を縫って、春と秋の年二回、奥さんのかつ子さんと一緒に茂来山に登っていたが、年末は一年で一番のかきいれどき。とくに大晦日は除夜の鐘を聞くまで仕事をするのは当たり前で、ご来光を拝みに行く暇などはなかった。

「一番すごい時は、お客さんを三十人くらい待たせていたからね。とくに二十九、三十日はご飯を食べる暇もなく、お勝手に飛んでいっちゃ、コップ酒を一杯ひっかけてから、また仕事をやる、というふうな状態だった」

しかし、その頃をピークにお

客さんが減り始める。ライフスタイルの変化で、年末年始は遊びに出かける人が増えてきたからだ。

「つまり、暇になったってことだね」

そんなときふと思いついたのが、親沢に住む竹馬の友、井上興一郎さんのこと。常男さんと同じ年で、誕生日が十三日違いという興一郎さんは十五歳の時から毎年欠かさずご来光登山を続けていた。

「じゃあ、俺も興一郎に負けずに、ご来光登山に行こう、と」

以来約四十年、元旦の朝は二人の息子さんとお孫さんたち、そして興一郎さんと茂来山山頂を目指す。

「天気？ 私は、山の神に初詣りに行くので、日が出るか出ないかは関係ない。よっぽど天候が悪くっちゃよすけど、いまままでひどい悪天候にぶつかったことはないね」

平成元年、山頂にある石宮が傷んできたため、有志が集まってお金を出し合い、新しいものに変えた。セメントや砂、水、石などをそれぞれ分担して担ぎ上げたが、常男さんは重さ十二kgの石を背負って登った。その石宮のそばに立つのが「浩宮様茂来山登山記念」の石碑だ。

山頂の署名箱の中に、登山者に記帳してもらう「茂来山を愛する会」というノ



山頂は60人ほどの人出で、快晴無風。「こんなに晴れ渡ったことは今までにない」の声があちこちから聞こえた。次男富央さんと＝富央さん撮影

ートが置いてある。元日、それを新しいノートに替えるのも常男さんの仕事だ。数年前の元旦、常男さんはそのノートに「八十八歳まで登る」と書いた。

「空が白々と明ける頃、山頂に到着。やがて、オレンジ色に染まった東の空に、眩いきらめきとともに太陽が顔を出した。万歳三唱とともに、祝砲が鳴り、長男常幸さんの吹くホラ貝の音が山々に響きわたる。

「家内安全、商売繁盛を祈るかつて？ うーん、それは欲をかきすぎかなって……。やっぱり、この山の下にいる人たちがみなさんの幸せを願いますよね。ここ（山頂）に立てば、そういう気持ちになるでしょう」

毎朝、茂来山、そして八ヶ岳に向かつて手を合わせるのが常男さんの日課でもある。

●取材・文／中村仁（ライター）、八千穂高原在住